

2013年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業 東北応援ツアー  
レポート 宮城県コース（2013年11月9日～10日）

糸田川 廣志（1972年卒業：理工学部土木工学科） 立命館大学技術士会

南三陸町と気仙沼市の被災地は2年8ヶ月経過したが、リアス式沿岸部特有のアクセス利便性の脆弱さと土地利用の柔軟さに欠けているのか、復旧・復興は進んでいるとは言いがたい印象である。

沿岸部を繋ぐ道路は町を結ぶ従来の道路で、安全性や防災面から土木技術への課題を感じた。土木技術は、先人達が住民を守りその生命と財産を守ること、経験に基づき知恵を出し継承してきたと考えている。

ここで必要だったのは、何度となく繰り返してきた津波被害等の経験を活かしてのアクセスの確保であったのではと感じた。千年に一度の大地震とそれに伴う大津波襲来を経験した我々現代人は、その科学技術と知恵で個人的利害を可能な限り克服し、防災、継承、救済、利便性確保等の大計を出す必要があると強く感じた。

私の案は、先ず気仙沼線の復旧は海岸線近くが多く問題も大きいので、有効活用できる用地は利用するが陸地側の安全な場所へ移し、線路ではなく高規格道路を造って利便性・救済防災面を確保し、何故ここに位置するのかを継承することである。高規格道路企画案は、中央にゼブラ2車線（非常時通行用で、通常時は原則使用不可）＋各外側に1～2車線＋歩道（5m両側）で構成する国道である。三陸沿岸に貫通する道路が後世への遺産となるようなものにできないかとの思いである。

そのルートは、南三陸町での語部の方が言っていた被災を受けていない神社をつなぐルートを含んだものでもよいとの気もする。

またそれは、故郷徳島で近い将来襲来する南海地震の防災、免災、減災にも通じることであり、海辺のみの道路ではダメとの警告がほしいと感じている。

我々土木技術者が後世に伝えるべき事は何なのかと、真摯に向かい合うべき課題の大きさを改めて感じた東北支援であった。

加えて、ささ圭さんとの補助金のあり方をやり取りした時、中小企業の企業再開・雇用確保が復興への道筋の一つであり、覚悟なき一瞬の全財産の喪失からの立ち直りには補助は100%でよいし、従前の復旧ではなく回復促進への復興補助が必要と感じた。そこを、個人としても訴えていかねばと感じた東北支援であった。